Mindanao Children's Library Foundation, Inc. SEC REG . NO. CN20031 5083

２０１０年５月号・季刊２７号

ミンダナオの風

執筆編集＊松居友　発行：ミンダナオ子ども図書館

ミンダナオの平和は、
世界のへいわだといつも思う
イスラム教徒とキリスト教徒
ＭＩＬＦ、アブサヤフにＮＰＡ
テロリストと共産ゲリラに正規軍
宗教対立と思想対立

マノボ族、バゴボ族、マンダヤ族
ビラーン族、アエタ族
少数民族と呼ばれる先住民と土地問題
プランテーションと国際的な資源獲得競争
それにビサヤ、イロンゴ、イロカノといった
本土から渡ってきた
移民系クリスチャンたちが加わって
モザイク模様のミンダナオ

でも、平和を乱す戦略やパワーが
どこから来るかと聞かれれば
ミンダナオ島の外から
先進国の世界戦略からと答える以外にないだろう

それほど、もともと人々は、平和に暮らしていた
ぼくらのように・・・
ここに平和が構築されれば
世界に平和が広がるだろう

Mindano Children's Libary Foundation, Inc.
MCL
SEC REG.NO.CN200315083

軌道に乗ってきた現地態勢

松居友

ミンダナオ子ども図書館は、8年目に入りました。5月は、年度初めの月。役員及びスタッフの構成を一新しました。

プレシデントには、イスラム教徒のアスレーさんが、スタッフ投票で選出されました。

今回はとりわけ、スカラシップ、保育所建設、医療、文化、農業の各セクションを作り、セクションリーダーが重要な役割と責任を持って、独自の分野の仕事に専念できる体制にしたのが特徴です。

役員と並んで、それぞれの分野で、セクションリーダーとアシスタントが子どもたちの状況や様子を、日本事務局を通して支援者にお伝えできる体制にしていく事も考慮しての構成です。

日本事務局が軌道に乗るまでは、今後も紆余曲折があろうかと思いますが、じっくりと時間をかけて、今後、現地の子どもたちと、日本の支援者との関係が密に出来るような体制を確立していきたいと思っています。

（詳しくはサイト検索『ミンダナオ子ども図書館』）

新しい年へ、新たな体制で臨む

4月から5月への移行期は、ミンダナオの学校を始めとする法人の年度替わり、つまり新しい年への移行期になる。

学校は、4と5月が夏休みで、6月から新学年が始まる。

故郷に帰れる子は帰るが、孤児や家庭の事情のある子たちは、ミンダナオ子ども図書館（MCL）に残っている。普段は、90名近くいるが、この時期は30名ほどと少なくなる。

しかし、読み語りの活動は、最も活発になる時期で、残っている子どもたちが核となり、里帰りした子たちの村へ、率先して読み語りに行く。何しろ夏休みで、村にはたくさんの子たちがいるから。

といっても夏休みは、貧しい家の子たちにとって、家にゴロゴロしている時ではない。親にとっては、子どもは重要な労働力で、読み語りに行っても、小学生以上の子たちは親と共に農作業や草刈りに駆り出されていて、残っている子は、小さい子たちだけだったりする・・・

学校は休みに入るが、MCLにとっては、年度替わりのこの時期は結構忙しい。

前年度の決算報告書の作成、年度最終のスタッフ会議、その承認を得るためのボードメンバー会議。

（今年度、ボードメンバーに提出した資料。年間決算報告・医療報告・兎口治療報告・2010年度人事構成・奨学生の状況や学年別および部族別全名簿・学業を停止した子の全名簿と理由を、インターネットに掲載したのでぜひご覧ください。かなりの量の資料なので、経費の都合もあり、ネット上での掲載のみである事をお許しください。

この資料と、私自身が記載した解説を読まれますと、昨年度と新年度のMCLの全動きがご理解いただけると思います。新しい、ポジションとスタッフの写真も掲載しています。

グーグル検索「ミンダナオ子ども図書館」または、http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL）

さらに、新しいスカラシップ応募の子たちの調査と選択、候補者への報告。デスクワークもさることながら、4WDで川を渡り、石だらけの山道を越え、時には馬に乗っての活動は、本当に厳しい。

電話も携帯も時計も無い人々。ほとんど自然の中で暮らしている山岳の人々を相手にするということが、どのような困難と不便と不経済と非合理と無駄と忍耐を必要とするかは、現地でないと絶対に理解できない???加えて、避難民化や戦闘や洪水、干ばつが襲いかかる。

自分の体にむち打って、時には、ニトロ舌下錠を（父と同じ遺伝病?）携行し

つつラフロードを越えて行く。医師には少し入院して休みなさい、と言われるが、ボランティア疲れも、子どものたちの顔、村人たちの顔を見ると消えていくから不思議だ。その点、日本で働いている方々の方が、大変だと思う。

創設記念日のシンポジウム

先日、４月末の日曜日。月例の学生総会が終わった。２００名あまりが集まるが、４月２０日を創立記念日と決めているので、４月の総会は毎年、特別の創立記念総会となりシンポジウムが行われる。

シンポジウムのテーマは、前回に若者たちが話し合って独自に決定。彼らが決めたテーマは、

「Eliminate Discrimination and Promote Peace to strengthen Unity of each tribe」「差別を無くして、平和を築き、異なった宗教や部族が、一体となって強い絆を作るには」

日本で言えば、中学生や高校生程度の若者たちなのだが、奥の深いテーマを選んだものだ（フィリピンには、中学がないので、高校一年が日本の中学一年生に該当する）と最初は思ったが、当日、５部門に分かれてのグループディスカッション、発表は驚くべきものだった。

部族間の偏見や差別、外国人の見下した対応。世界で、あちこちで、女中、子守、エンターテイナーとして、苦言も言わず働くフィリピン人。ミンダナオでもくり返される、宗教の対立、部族対立、無知から来る偏見。怒りをすぐに暴力で現す対応、戦争など様々な問題が身近にある。

日本の若者たちにとっては海外の遠い出来事だろう、しかし、ここの若者たちにとっては日々の現実であるだけに、彼らの発表は優れていたし体験に基づいた重みもあった。

「差別撤廃」「搾取と貧困」「人権平和」といった議題は、日本では、左翼か部落解放か、はたまた共産主義者かと思われそうだが、それがキリスト教徒にとっても、イスラム教徒にとっても、先住民族にとっても日常の切実な問題で、本当は世界が議論を必要としているあたりまえのテーマなのだと知らされる。

ごく普通の若者たちが、このごく普通の問題に、ごく普通の気持ちで熱心に、議論を重ねていく姿はすがすがしい。

しかも、その合間に、みんなで手を取り合って、童謡を歌ったり踊ったり。イスラム教徒も移民系クリスチャンもマノボ族も一緒になって。

シンポジウムは、録音し記録にとどめた。内容もさることながら、その量もかなりのものだ。今、文化セクションスタッフたちが書き起こしている。英語でまとめてネットとブログで発表するが、日本語に訳して本にすれば、日本の若者や人々に大きな示唆を与えるだろう。

２００９年度の終わりと、２０１０年の抱負

４月２０日に７周年を迎えたと言う事は、ＭＣＬは、７歳の誕生日を迎えたと言う事だ。

一つの事業を立ち上げ軌道に乗せるためには、基礎を造るだけでも１０年はかかる、と言うのが、過去出版事業部を立ち上げたときの経験からも言えることだから、基礎を造るためにはあと３年の猶予が必要だという事になる。仕上げとしてやらなければならないのは、支援者の希望に迅速に答えられるような、密な関係の構築だろう。

ＮＧＯも一般の事業も、個人の集まり？

ＮＧＯを立ち上げようと考えたこともなく、ピキットで避難民を見て胸を痛めて出発した団体なので、現地の多くのＮＧＯが、海外からの資金を頼りに運営され、補助金を使い切るとそれで終わり。しかも、そのほとんどが、スタッフの高給に消えていく様子を見て思った。ＮＧＯって、何なんだろう。しかも、紐付きの補助金だから、政治的な動きに利用され、本当に支援を必要としている人々の手にわたらない・・・

そんな様子を見て、政治や企業、国際的な資源獲得戦略に利用されない行動をとりたい・・・それには、徹底的に個人の良心に基盤を置いた支援金集めをしなければならない。

２００９年の支援金は、２千万円を超えるのだが、全て１００％、個人寄付。寄付者の総数は、１７９６名。

政府や団体からの支援金は、宝くじ？

団体からの支援も否定はしていない。大きな金額で、ＭＣＬ単体では出来ないプロジェクトを現地のために推進できる。

ただ紐付きであることを自覚し、一過性であることをしっかり認識しなければならないと思った

例えば今年も、政府の草の根無償支援で、ブアランの小学校を建設できそうだが、前回のマカブアル同様に、ミンダナオ子ども図書館（ＭＣＬ）は、完全にボランティアで関係する事に決めた。

いろいろな筋から、「人件費の項目にスタッフの給与を含めても良いようだよ」と言われた。台所事情が厳しい、小さなＮＧＯには、大きな誘惑だったが、政府のＯＤＡは日本国民の税金だし、国民なら誰しもが、公務員は別として、税金は１００％現地の人々のために使われることを期待するだろう。

現地スタッフとも論議した結果だが、地元の人々が喜ぶこと、その学校に通っているＭＣＬの子どもたちが喜ぶことを考えると、支援金は１００％地元に還元

したいという結論になった。

政府や団体の支援金に、給与という恒常的な経費を頼ることによって、自立が奪われ、判断に制約が加わることを危惧した面もあるが・・・？

しかし、ボランティアだからといって、安易に対応するのではない。建設管理責任はＭＣＬにあるのだから、資材調達には同行チェックするし、建設状況も保育所建設の経験を生かして迅速、かつ合理的にマネージメントしていく。また、それが出来るだけの現地スタッフが育ち自立してきた。ほとんどがかつて皆さんが支援されていた奨学生たち。

公平自立したコミュニティー作りを目指して

現地での独立した平等で平和なコミュニティー作りの実験も、プロジェクトの一つだ。まずは、ＭＣＬそのものを、公平なコミュニティーとして確立させる。最初に改革したのが給与体系だった。

かつては、プレシデントなどの地位によって給与が異なり、まかない（ハウスマネージメント）やドライバー、大工は低かった。こちらの一般的な論法に従っていたからだ。当然、年功序列で給与も変わっていく。しかし、内部の不和や妬み、

不満や不正が絶えない。

そこで、一昨年から給与を一律上限５０００ペソとした。日本で言えば、1万円弱。低い給与だが、こちらでは私立小学校の先生の初任給ほど。3年ほど働けば、プレシデントもドライバーも、経理も大工も、まかないの仕事も同じ金額。

ちなみに公立学校の先生の給与は、国の定めた給与水準に基づいているから８０００から１５０００ペソで、一般人のほぼ2倍から3倍。ＮＧＯも同様の基準をとるので、現地では「公務員と海外ＮＧＯのスタッフが高給取り」と言われる理由だ。ただし、公務員の方が安定している。

ちなみに参考までに、日雇い労働者の月収は、良くて２０００から３０００ペソで食事も自前。女中で、１０００から２０００ペソ。働いても働いても、子どもたちを大学はおろか、高校も卒業させられない。マノボ族の家庭に至っては、ほとんど小学校はおろか、家族が3食たべられない！

子どもの教育と医療保障

ＭＣＬの給与５０００ペソは、高給ではないが、健康保険と年金保障は給与から差し引かず別に出しているし、結婚して子どもが出来れば子どもの学費と１７歳までの医療はＭＣＬで面倒を見る事になっている。家庭の経済を圧迫するのは教育と医療だから、その利益は大きい。

実はこれは、政府による社会保障の確立していないフィリピンにおいて、独自に社会保障を確立すべきと考えて編み出した方式だ。つまり、給与は高くないし、年功序列や昇給制度もないけれども、働き手の健康保険と年金、子どもの学費と医療費は、ＭＣＬが拠出することで生活保障が確立している。

さらに、ミンダナオ子ども図書館内部に住み込めば、食費と部屋代と電気水道代などがただになるから、賃金基準が安くても、実質的には相当お金を使わずに残せる。

3食たべられない極貧の家庭からやってきても、皆で話あい、分かち合って助けあい、出来るだけ多くの仲間が憂い無く生活して行けるようにと言う配慮からだ。こうした独自のコミュニティー作りも、ここで育っていく現地の若者たちに可能性を提示する、実践的実験だと思っている。

すでに農業セクションは、スタッフの給与も含め現地での自立が確立している

農業は、アジア学院方式で、現地消費を中心に考えているが、収益はまだ少ないものの、スタッフの給与はまかなって独立採算を達成しているし、ＭＣＬの経費削減（食費）に大きな貢献をしている。

今後は、この体制を文化セクションに広げてゆき、現地から、海外への通信販売を基盤にして、収益事業を軌道に乗せることを考えている。

と言っても、出版以外は規模の大きな事業は考えていない。むしろＭＣＬの奨学生で障害のある子たちや極貧の孤児の子など、行き場の無い子が手作業によって、自分の給与が捻出できればそれでよい。その意味では、木彫、絵画、絵はがき、そして裁縫を勧めている。

左は、筋ジストロフィーのアリエル君と彼が作った書類ファイル。

裁縫は、奨学生たちの制服を縫うことで、それ自体収益があり、ＭＣＬの経費にも貢献できる。

スカラシップ支援者にとって、成績が伸びない子たちの行く末が心配だろう。

ご安心ください。落第や成績不振で進級、進学出来ない子たちには、裁縫や整髪、運転資格や自動車修理、コンピュータ等の短期技術トレーニングコースに、独自に行かせてあげている。実際的に、こちらの方が就職率は高いという。

成績も良く野心があり、羽ばたく力を持った子たちは、自分で仕事を見つけ大都市や海外にも羽ばたいていけばそれで良い。卒業した奨学生たちには、教師も看護師も技師も大手の銀行勤務もいる。将来、そうした子たちが、次の卒業生たちを引っ張ってくれればよい。

逆にＭＣＬ自体は、貧富の格差があまりにも大きな不公平きわまる格差社会を見て、行政に頼らず、貧しい家庭の出の者でも不安無く子育てし、病気になっても保証がある、弱者中心の独自のコミュニティー作りを狙っている。

多くの卒業生たちが、給与が安くてもよいから、ここで働きたがるけれど・・・

今までも、ＭＣＬでは、上から私が指示を出す形ではなく、正式な会議の場で提案し、皆で議論し、現地の若者やスタッフが、自分たちで考え、試行錯誤しながら実行する形でやってきた。

時間と動力と、時には失望もあるが、大切なのは、現地の人々が仕事を理解し、自ら新しい発想をし、言葉で議論し決定した後に、実行していく。つまり現地が真の意味で自立していくことだと思う。

経済的な自立も大切だが、それ以上に大切なのは、精神的自立。現地の人を自立させていくと言うことは、子育て同様に、忍耐と我慢と根気が必要なのだと思う。日本と異なった環境の独自の良さも失わずに・・・

医療に関して

医療に関しては、治療患者の一人一人の名前と病名、治療費用をネットに載せてあり、紙面の都合でそちらでご覧いただければ幸いです。医療費は、年初に月額約１０万円。年間で１２０万円の予算を計上。しかし、最も予想困難なのが「医療」と「車修理」。外部から訪れてくる極貧の子どもたちの治療を重視。しかし、こうした子たちは、突然運ばれてくるので、交通事故に似ていて、緊急に助けなければならない。

年齢は、１７歳以下、一度入院した患者は、基本的に受け付けていない。「入院させよう」と思いつくだけでも、いざとなれば、水牛や土地を売っても何とかできるという極貧家庭ではないから。極貧家庭の場合は、村の祈祷師に頼んで、後は死を待つだけ。その様にして運ばれてくる患者だけを厳選する。それでも毎年、医療予算はオーバーする。

２００９年の医療支出は、総計で644,617.13ペソ。全部で１６２名の子たちの治療をしている。これに、今年度の兎口完治１６名を加えると、皆さんのおかげで１７８名の子たちを救えました。

ここでも、かつての奨学生で看護学を卒業したスタッフ、フェさんが本当に献身的に活躍した。小柄で子どもにしか見えないフェさん。看護士として働くなら小児科しかないね、と冗談を言われながらも、その忍耐力と意志、奉仕精神は強烈。

スカラシップ奨学生の状況

奨学生の状況では、大学生７９名、高校生１１７名。（フィリピンに中学はないので、実説的には中学生で４年制）小学生１７２名。合計で、３６８名が２００９から１０年度のスカラシップと里親。

そのなかで、学業を停止した子は、大

学６名、高校２名、小学校９名。合計１７名。理由は、大学生の場合は、結婚、妊娠、親が病気などで看病、仕事を手伝う等。小学生の多くも、親の手伝いでサトウキビ刈りや仕事をするために学業を停止する子が多くいるのが特徴だろう。３６８名のスカラーを抱えて、１７名が停止。この数が多いのか少ないのか？

毎月月末のミィーティングでソーシャルワーカーがカウンセリングしたり、私も個人的に相談にのったりしてスタッフは全力をつくして子どもたちのケアをしているが、スカラシップの選択基準が、成績優秀な子を優先しているのではなく、学校に興味があることが前提ではあるものの、親の無い孤児、片親の子、家庭崩壊の子、戦闘地域や山岳地域の子で極貧の子たちを採っているので難しい面も有る？

しかし、落第や成績不振で進級、進学出来ない子たちには、裁縫や整髪、運転資格や自動車修理、コンピュータ等の短期技術トレーニングコースに、独自に行かせてあげている。実際的に、こちらの方が就職率は高いという。

今後の展望

７年間、現地で、たった一人の日本人としてひたすら走り続けてきました。８年目に入り、ようやく現地スタッフも育ち、体制も整ってきました。しかし、その分、日本の支援者に対する対応が、疎かになった事実は免れません。その責めは負うとして、今後の展望として、最も重要なのは、日本の支援者に対する迅速な対応を確立することだと思っています。

ヒナイヒナイ　バスタカヌナイ（ゆっくりゆっくり　でも　たえまなく）水牛のように、全力で前に進みながらも、ゆっくりで良いから確実に。日本事務局の態勢を構築するのにも、紆余曲折があると思いますが、じっくりと取り組んでいきたいと思っています。

学業停止した子、その理由

（小学生）
Sabino,Larry-Luhong ３年生 ／生活のために、親を助け、サトウキビ農場で働くことを選んだ
Asam,Ramil ５年生 ／両親を助けるために、サトウキビ農場で働くことを選んだ
Sabino,Joemar-Luhong ３年生／生活のために、親を助け、サトウキビ刈りで働くことを選んだ
Theresa Iclam ４年生／親のすすめで結婚を選んだ
Laydan,Bannery ６年生／両親を助けるために、サトウキビ農場で働くことを選んだ
Bugcal,Alger ４年生 ／父親が病死、母親が精神的におかしく家族をささえるために本人が畑で働き妹が奨学生に
Tawas,Joelito ６年生／両親を助けるために、サトウキビ農場で働くことを選んだ
Tibulan,Ribenie ４年生 ／両親を助けるために、働くことを選んだ
Manib,Emily ４年生 ／エミリーは、貧しい両親兄弟を助けるために小さな食堂で働くことを選んだ

（高校生）
Nicolas,Jinky Rose ３年生 ／両親の居ないジンキーは、成績がのびず養い親のために働くことを選んだ
Piyang,Jayger ３年生 ／ジェガーは、成績がのびず家族のために、ゴム林で働くことを選んだ

（大学生）
Catadman,Vivian ４年生 ／妊娠により停止。ＭＣＬのサリサリで働く予定。
Maangue,Lea １年生 ／結婚
Camit,Evangeline １年生／頭痛がひどく、授業に参加できず休学が必要と判断された
Suhat,Ruela １年生 ／ＨＲＭの食材が負担できず経済的に続かず実家に帰った。
Lowas,Jelyn １年生 ／ＨＲＭコースの食材を母親が負担できず。本人も母親を助けて仕事に就きたいと願った。
Lopoz,Noren ２年生 ／ＨＲＭの食材が負担できず落第した。親戚の元に帰り、仕事をさがす。

成績が伸びなくても、就職率の良い短期コースのＨＲＭ（ホテルレストランコース）を選んだ子たちが食材を自己負担できずに、ストップしたケースが出てきました。これほど食材がかかり、生徒持ちだとは知らずに推薦。今後は、費用のかかるＨＲＭのコースは推薦しないことになりました。裁縫、運転、理髪などの技術専門学校に独自に行かせています。

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
お金が無くて学校に行けないときと
病気になっても病院に行けないとき・・・

ミンダナオ子ども図書館

1、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付

専用の振り込み用紙をご請求いただくか、直接下記の振替口座にお願いいたします。
寄付をいただいた方々には、ミンダナオより年四回季刊誌「ミンダナオの風」
をお送りしています。

2，大学生高校生スカラシップ支援の方へ・・年額６００００円（月額５０００円）

振り込み用紙の通信らんに「スカラシップ」と書いて、一部振り込んでいただければ、
年四回の季刊誌と手紙、７月プロフィール、２月スナップ写真、５月成績表などが届きます。
文通やプレゼントも可能です。訪問の際は、自宅にご案内します。

3，里親支援（小学生）・・・年額２４０００円（月額２０００円）

振り込み用紙の通信欄に「里親」と書いて、一部振り込んでいただければ、年四回
季刊誌と２月に絵手紙、７月プロフィール、２月スナップ写真が届きますが、
文通やプレゼントは不可。訪問の際は、自宅にご案内します。

4、保育所建設支援・・・３０万円（一括振込みでお願いします）

振り込み用紙の通信欄に「保育所建設」と書いて振り込んでいただければ、年四回
季刊誌と１０月には毎年現地の保育所のスナップ写真。開所式参加や訪問も可能です。

5、物資支援：詳しくはウエッブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館」

古着や古靴の支援もよろしくお願いします。

郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』

連絡先

日本事務局
日本事務局は、現在全面的に業務を見直し、新たな体制を構築中。
連絡先など、次号でお知らせします。ご不便をおかけしますが、連絡は本部にお願いします。

現地本部
現地携帯：001010-63-(0)9219603640（松居友）日本滞在中：０８０５５０２３４４６
現地オフィス Tel:001010-63-(0)64-288-5621
Eメール：mclstaff@zar.att.ne.jp（松居友）　ウエッブサイト検索：『ミンダナオ子ども図書館』
現地住所：Mindanao Children's Library : Brgy. Manongol Kidapawan City Cotabato 9400 Philippines